

高・大・一般 漢字（草書）

加藤 東陽
 書譜（孫過庭）
 ⑥



人書俱老（人書俱に老ゆ）（人も書も老境に入って共に滋味が出てくる意）

〈解説〉

今月は草書学習のまとめです。これまで学んだように全体構成を検討する時も、草書においては「リズム」を第一に考えましょう。一般的に、リズムによって生ずる響き（余韻）は、法則で割り切ることのできない「二律背反など矛盾性の上に立つもの」であるとも言われています。このリズムから、実画と虚画（余白）に何が生まれてくるかを考えてみることも大切です。

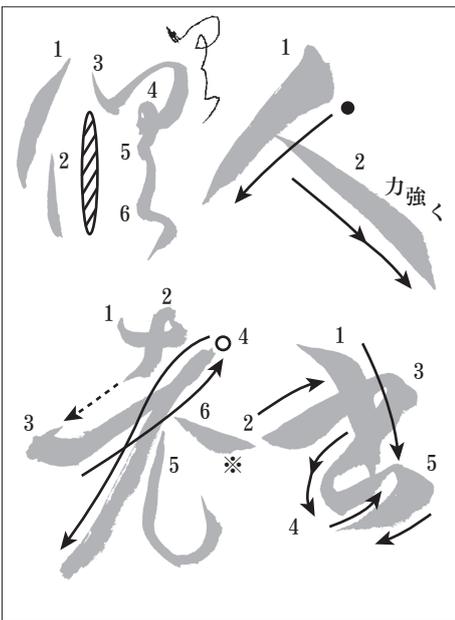
〈学習上の留意点〉

「人」：一画目と二画目の起筆・収筆の太細の妙（リズム）のとり方に着目してください。

「書」：太細のリズムの変化の連続です（図1・2・3・4・5）

「俱」：偏（図1・2）の起筆から収筆まで、太細のリズムに留意しましょう。旁の「具」（図の4）は実画なので、筆脈を丁寧（たいせい）に運筆しましょう。

「老」：三画目と四画目は、太細の変化を強調しています。最終画（図の※印）は払いますが、隷書の形が残っています。



高・大・一般 漢字

新(10級から五段までは作品用紙として画仙紙八ツ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)の出品。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

鈴木 昭和



〈釈文〉 梅花落處疑殘雪 柳葉開時任好風

〈出典〉 杜審言「大酺」

〈読み〉 梅花落つる処、残雪を疑い、柳葉開くとき好風に任す。

〈大意〉 梅の花が散った所はまるで残雪のようで、柳の葉が芽吹くときは好風に任せて美しく伸びる。

〈解説〉

春の情景を謳う部分を杜甫の祖父の詩から抜粋して、二行書にしました。表現としては多めの草書に、行書を交えて書きまとめています。適度な連綿を含み、文字に自然な大小、太細を墨継ぎ(梅・残・開)のリズムにあわせて、表現しました。一行目との関連で、「葉・好・風」をやや余白に響かせ、二行を関連付けています。

今回は「開時」を作品の見せ場としましたが、「開」に草書を使って軽やかにする方法もあったのではないかと振り返っています。

過去の競書出品作品を思い出すと、「字形へのこだわり」が強い作品が多かった記憶があります。ぜひ今回は筆勢を心掛け、墨量の変化がある作品を目指してみてください。本作は兼毫筆を使っています。紙質と墨の濃度を調整しながら書くことが重要です。

本課題はあくまでも参考です。ご自身の古典学習や美意識に従って、積極的に字書を引き、創意をもって自由な発想で制作に臨んでください。

なお、制作前に字典などで検字をされると思いますが、「残」の最終画は二つの点または二つ分の長さなので、注意してください。また

「好」は一般的に女偏と「子」ですが、偏と旁の文字が三文字続いたため、表現を工夫しています。上下、隣の文字との関わりに応じて、作品内で使い分ける参考にしてください。ただし、あまり使わない文字を使っていいわけではありません。一つの表現に固執しないように、書いた作品を先生や仲間に見てもらうことはとても重要です。

重要です。

草書	行書	
残	残	残
好	好	好

(二玄社『新書道字典』より)